

Title	告白的文学における愛の問題：三つの近作をめぐる試論
Sub Title	"L'amour" dans la littérature de confession, autour des trois oeuvres récentes
Author	佐分, 純一(Saburi, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.44- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

告白的文章における愛の問題

——三つの近作をめぐる試論——

佐 分 純 一

自分の生涯を語るということは、自分自身の発見を目ざして出発することにはかならない。

自分を語れば母を語ることになり、母を語れば自分自身を語ることになる。

私は、書くための物語を持ちあわせてはいない。自分が物語なのだ。

J・グリーン『私の人となり』

J・ボレル『熱愛』

V・ルデュック『私生児』

「ああ！ あべこべの人生だ。普通は、それなしにはすまされぬ美しい乳房、母親から先ず人生が始まり、それから成長して一人前になると、ほかの数々の愛で最初の愛が幾分おろそかになるものだ。私の場合はそれとは全く違っていた。⁽¹⁾」

ポール・レオトー Paul Léautaud が、自ら断定するように、彼の母子関係は、まさに世人とは逆の過程をたどった。生後間もなく母に捨てられ、幼少時代は、ときれときれにしか再会せず、かなり成長してすでに情事も経験したあとで、あらためて母親を一個のへ女として見るようになってしまった。「こんな風にこっそり抱き合っているのを人が見たら、二人のことをどう思うだろうねえ？」母親の方も、息子をわが子としてよりも、若い男として感じる気持が強かった。エディップス・コンプレックスとは、すでに常識化し

た見方だが、それはあくまで潜在意識をあばいた上でのことである。常識的な健全な観点からすれば、レオトーのようなケースは、異常と言つてよいであろう。しかし、それは「普通」とは違うかも知れないが、当事者の側からすれば、どうにもならぬ成長過程であり、親子関係だったのだ。敢て言えば、不自然が自然だったのであり、異常が正常だったのである。だからこそ、さらに異常な道をたどつたヴィオレット・ルデュック *Violette Leduc* も、「私の境遇は、別に変つたものではない」といふ言葉で自伝小説『私生児』*La Bitarde* を綴りはじめたのである。自分は「死ぬのがこわい。この世に在ることを歎き悲しんでいる」同じ人間である。人は、呪われた私生児」という刻印を、父なし子に対して焼きつける。主人公は、この熱い焼印と、そのうえ、冷たい母親から負わされる罪の意識にさいなまれつつ、ひたすら自分の生きる道を喘ぎ求めた。同作品の序文でボーヴォワールは、作者の体験の意義をまとめ、この作品が、「自由によって運命を奪回することこそ人生だということを、珍らしいくらい明晰に示している」と書いている⁽³⁾。ところで、社会が正常人の組織であるとすれば、異常な境遇、性格の人間は、どうしても、ありのままの姿で自分をさらけ出して生き続けることはできない。ことに、自己を抑制し矯正して他と協調することのできない幼時には、他の健全な子供たちとの間に違和感や摩擦を生じて、孤立の状態に陥ってしまう。人間は生まれながらにして孤独なものだとは、誰しも口にする言葉だが、果たして正常円満に成長した人々は本当にそのことを幼少時から痛感していたであろうか。それは、大人になってから誰しも気づき感じる程度の、月並みな人間観ではなからうか。

「私は父を知らずじまいになった。私の生後四カ月目に死んでしまつたし、それに私が生まれてから一週間か半月もすると、彼は入院してしまつたのだ。」⁽⁴⁾

一九六五年度ゴンクール賞作品である『熱愛』*L'Adoration* の冒頭句である。私の知るかぎりでは、これほど親子の愛情関係と人間形成の問題をテーマとして、徹底的に追求した小説は、めつたにないと思う。これは、作者ジャック・ボレル *Jacques Borel* が別紙で打ち明けているように、典型的な自伝小説である。作中、母親を「医者や心理学者のように」探究するとあるが、単に個人の親子間の感情などを描写記述したものではない。精神分析学の著書以上に、親(母)の愛育と子(息子)の成長との関係が精密に分析され、人

間の「愛」を中心として、さらに広く考えさせるだけの厚味と深さをそなえている。作者は、英語教師のかたわら批評家として活躍していたが、この際その道に飽きたらず、自分の生涯を掘り起こし、母親との絆をほぐしつつ、一卷の小説にまとめあげようと思い立った。それとあわせて、自己の本質的な「欠陥」(manque)を、作品を創造することによって解消していこうという念願もこめられていたようである。その点いわゆる想像的意匠に発する作品とは、いささか肌合いの違う性質を含んでいる。しかし、その動機や発想は別として、この小説は、父を知らず母との親密さのみに頼って成長した男を主人公にしておりながら、さきの『私生児』とともに、変則的な人間形成の裏面から、かえって人間の愛と孤独を文学作品として豊かに表現し得ていると思う。

健全な両親のもとに生まれ、豊かで知的な愛情に包まれて成人した人間と、何等かの形で負い目を担う人間、つまり親が早逝するか、異常か冷淡な性格であるとか、無責任に放置されて成長したとかいうような境遇の人間とは、同じ世界に生きてゆくうえで、どれほどの差を生じるものであろうか。人間は千差万別である。まして、変態的な異常な成長過程を生きる人間の場合は、ますます複雑でそれを一般論として述べることも、少なくとも文学のうえで公式的に述べることは不当かも知れない。しかし一つだけ言える事実は、不完全な人間(Ⅱ大人)に育てられた人間(Ⅱ子供)は、完全に円満健康な身心を獲得することが不可能だということ。円満な条件に恵まれた人間は、自己のうちにひそむ「欠陥」を余り意識せずには、正常な条件を欠いた人間というものは、必ず身心の内奥に、ある種の大きな「欠如」をひそめ、最も鋭敏にそれに苦しむということ。ことに後者は、幼い頃から「何か分らぬ不足したもの」に人知れず悩まされるということである。人間は、もちろん先天性によって能力に限界があるが、その個人差にもまして、上述のような条件の差も、大きく個人の運命を支配し、それがもつて生涯の間には様々な現象が起こってくるものである。ある種の文学作品は、そういう人間の内的苦斗や対外的な不調和・疎外感というものを如実にあつづけているとも言えよう。J・J・ルソーの生涯でさえ、偉大な神経症の人間のそれであったとも見られないことはない。

ところで、何も知らない幼児は、人間の誰もが必要物として要求し摂取する物的な糧を、自然にそなわった諸機能によって求め

吸収してゆく。たとえ正常な条件に恵まれた子でも、長い成長の途上では、幾多の障害や不満に遭遇するであろう。まして、父母の庇護を失ったり、逆に親の悪い遺伝や影響を蒙ったりする幼児は、それだけ多くの負担を負わされ、無意識に苦悶と不安を抱きながら、何等かの代償を欲求するようになる。それが身近かな大人にすぎる場合もあろうし、戯れの対象となる物質の場合もあろうし、また、全く異常な行爲となつてあらわれることもあろう。こうした代償行爲とその対象についても、文学作品、ことに自伝的な小説では極めて具体的に描かれているものである。例えば前記の二作では、同じように祖母が、主人公の淋しさを緩和する存在として登場する。一般の場合、祖母はむしろ自分の淋しさを紛らす対象として孫を溺愛する傾向が著しいが、この場合には、むしろ孫の姿勢の方が積極的であり必死である。再婚した母親の裏切行爲によつて傷ついた少女にとつて、祖母は「この上もないひと」であり、「百段も高いところにいる女王か聖女のように、唯一無比の存在」であつた。〔私生児〕また、母親との間に何のひびも入らぬ男児ではあつても、父親を知らず、母親ともしばしば離れて暮らさなければならぬ場合、祖母は同じく愛情の不満をぶつける絶好の対象となる。男の子は、必ずと言つていいほど短気で発作的に激怒し粗暴になる。彼は、祖母を「おびやかさずにはいられず」、「台所のテーブルの引出しを開け、包丁をつかみとつて彼女の顔に投げつけ」たりする。〔熱愛〕両者の態度は異なるが、いずれも片親だけしか持たぬ子供の、欠けた愛情を求め、言いかえれば所有への渴望 (*faim demeurée de possession—L'Adoration*) のあらわれにすぎない。実の親以外に同質の愛を求めても、所詮は孤空を掴むように、子供の魂はとまどい立ちつくさなければなるまい。『私生児』の主人公は、実母が自分の孤独感と男への憎悪を子供にぶつけるような、愚かで非情な人間であるために、最も悲惨な条件に陥り、『熱愛』の主人公は、母親と離れて暮らす折など、自分の底に、言い知れぬ「殺意がひそんでいるような感じ」を禁じ得ないのだ。(なお、代償的な存在として叔母、姉、女中などの場合もある。ホーツーン、J・グリーン、ボードレルなどその例にもれない。)

こうした孤独の条件を強いられる幼児の性向は、次のような一節にもよくあらわされている。

「彼女は孤独な幼時をすごした。情愛のしるしごとく拒まれ、彼女は無口になり、自分にとじこまるようになっていった。よく部屋の片隅にうずくまり、何でも手もとに見つかるもの、家具の足やカーテンの総飾りで、何も言わずに戯れるのだった。」⁽⁷⁾

ジュリヤン・グリーン Julien Green の『モン・シネール』 *Mont-Cièvre* における主人公エミリーの幼時にふれた文面であるが、この少女も、偏狭な未亡人たる母親の支配から逃れるように、祖母の膝下に甘え、日頃は寡黙な口をほぐし心を開いて長いこと語り合っているのである。少女にとつてうれしいのは、祖母が「大人に話しかけるように」扱ってくれ、自分が「無知な女の子」とは感じさせないことだった。孤独にとざされた子供は、自分を語り解放し、何よりも自由を求めているのだ。そして、その「自由」も「自己表明」も、親の大きな愛の裏付けなしには実現することができない。

このように、自立性や自己統一の能力ができていない子供では、どんなに求めても、かけがえない親の欠如を満たす存在は、この世に求むべくもない。健全な境遇にある子供は、一時的な欠乏や不満が、次の機会には別の形ででも埋めあわせられるものである。そこには、深淵の上に臨むような、恐ろしい「不安」(angoisse)はない。しばしの不安や混迷は、すぐに解消されるという安心感がある。そういう精神の安定感、人間の成長を着実にし、しかも順調な時間のうちに進めてゆく。ところが、不運な境遇の人間は、幼時の欠陥をいつまでも満たされることなく、不安のうちに成長しなければならぬ。彼は、親が欲しい、優しい善良な親が欲しいにもかかわらず、その本能的な深い欲求は、永久に満たされない。その点だけは、たとえ無意識にもせよ、まさに絶望の状態を早くから強いられているわけである。子供が絶望に堪えられるものだろうか。人間に平等に与えられるべき条件、動物にさえ与えられている最低の条件、それを欠いて生きなければならない子供は、その絶望に堪えられるものではない。

「どうして私が、父の死を一つの不足とか置きざりとして感じとる気になれただろうか。私は彼の不在を、要するに、ほとんど気にとめなかったのだ。」父は、彼(祖父母の友達)のように護衛艦の船長だとか、最近進水した小型駆逐艦を指揮しているのだとかと私に言った。⁽⁸⁾

「あなたのお母さんはどこにいるの？」

——パリで働いているの。今に手紙をくれるわよ。

——お父さんは？

——お母さんはパリで働いてると言ってるじゃないの。

(……………)

——あなたはあたしの言うことを聞いちゃいないんだわ。お母さんが、あたしのお父さんなのよ。」

二つの違った立場から書かれた作品ではあるが、子供の魂の底をえぐれば、出てくる答は期せずして一致するはずである。こうした子供は、生涯、親の死を諦めきれない。いや、無意識のうちにもそれが「認められず」逆に想像の彼方で、また夢のうちで理想的な親の生を肯定し続けるのである。

しかし、これこそないものねだりの幼い心理であり、それは、成人した暁もそのままの形で、心のどこかにその不満、不安、傷がつきまとうであろう。けれども、社会に出れば、どんな境遇を経た人間でも、同じ条件で生きなければならぬ。肉体の欠陥をもつ者は、病人として多少のいたわりを示されるが、精神の傷は、全く外見上分らぬものだけに、異常者にならない限り、人に知られず、場合によっては劣等者とか変り者として軽視される。従って当人は、ひそかに何等かの負い目(≡劣等感)を担い、自己の欠陥や弱点を悟られまいと、それと斗いながら生きていく運命にある。そういう人間が、生理的に強壯な体軀や美しい容姿に恵まれた場合はまだしも、肉体上の欠陥をもつときには、劣等感が特に強くなるものである。(ポレルとルデュックがともに不恰好な鼻の持主で、その劣等感が初めに提示され、主人公の複雑なコンプレックスの象徴とつけられるが、ことに後者の醜女意識は抜きがたいものがある。またグリーンは、かなり美しい容貌にもかかわらず、美男に対して常に「気おくれ」を感じたという。) こういった人間の行爲は、アドラー流に言えば、劣等感からの回復脱却の意志に発するものともれるが、とにかく愛育の欠如と、そこからくる幼児の神経質が、肉体の健康な成長を阻むことにもなるのだらう。ある者は、劣等感によって自己を自然に表現することができず、常に自分を隠して安心感を保とうとする。ある者は、逆に自分を誇大に表現して他の上に立ち、他を支配することによって安定感を実現しようとする。E・フロム Erich

Fromm は、歴史的見地から、人間をマゾヒスト的タイプとサディスト的タイプに分けて考察しているが、われわれが問題とする類の

人間において、その特徴が最も顕著にあらわれるものである。この種の人間は、言いかえれば神経質であり、さらに一旦神経症に陥った者にとっては、精神の病が劣等感の極端な防衛手段となるのだ。ここに援用したような文学作品では、ことに主人公の心的傾向としてそういう異常心理の面も鮮明適確に描出されている。(ポレルの精神分析、ルデュックの錯乱する心象風景、グリーンの作中人物の暴力や狂気など)

ところで、これまでも述べてきたようにそういう人間のうちにひそむものは、幼いときから抱いている、愛の強い欲求 (ce désir [si mal assouvi en moi] d'être aimé—L'Adoration)、孤独感をいやそうとする激しい衝動である。それに反して、健全な人間の愛は、要求するより先に与え、少なくとも与えようとする力をそなえているであろう。「愛は受動的な感情ではなく、活動的である。愛の活動的性格は、愛とはもともと、与えることであり、受けとることではないと述べることによって描きだせるであろう」とフロムも言っているが、そこには自然に湧出する豊かさがあるはずである。それは愛の理想的な姿であるだけに、精神が成熟し愛情が豊かに実るためには、子供が母親中心の愛着から父親中心の愛着へすんだうえて、両者の総合されたものを体得することが、その基礎的な条件となるのである。そういう過程を経ない、心の貧しい人間の場合、愛は本源的に「愛されたい」という受動性が強すぎ、愛を与えようとする場合、常に意識的な努力と緊張、つまり意志と理性と使命感のようなものが働かなければならない。しかもその裏には、やはり与える愛に対する報酬を本能的に求めているのかも知れない。普通の子供は親に与える必要なく愛に浴し、ただ甘えて親に依存するだけで自然に成長していける。しかし、愛情を求めたり甘えたりする対象を失った子供は、永久に小兒的な要素から脱しきれず、「永遠の子供」(ポレル)、「手のかかる子供」(ルデュック)としてとどまるものである。また、他人の情愛や恵との裏に感謝や報恩の欲求を察知して懐疑的となり、猜疑心を禁じ得ない場合が多い。まともに成人した人間でも、死に至るまで幼稚な要素を拭い去って完全な大人になったと言いきれる者はいないであろう。しかし、正常者はそれを自制し超克する大人としての能力を強くそなえている。いわば自己に対する厳しい力を体得していると言えよう。彼等は、自然な安定した成長過程をへて、両親からの分離、独立を実現した結果、成人に必要な、父母としての人格を身につけているからだ。そういう人間ならば、いたずらに過去の残滓にとらわれて、幼時の楽園を

追慕することはない。ところが、何等かの形で自然な成長をはばまれたものは、肉体的には成人しても、常に過去の残影におおわれている。普通の場合は、親との分離が自主的に順調に行われるが、親を失った子供は、その死期の瞬間、他動的に分離を強いられるわけである。前者は、幼時の楽園から危険な外の世界へ出るすべをすでに教わっている。しかし後者は、まだそれを知らぬうち突然外へ追い出されてしまうのだ。〈楽園〉に対する両者の認識が全くことなるのは明らかであろう。前者にとって、それは過去の楽しい思い出となりきる。彼には、現在をふまえて未来に生きる姿勢ができていたからだ。これに反して、後者にとっては、それが過去として客観視できず、現在の中に過去が、過去の中に現在が逆流し、人間の進むべき順路が乱されざるを得ないのである。ここにとりあげたような性質の文学には、その意味で過去が一つの現実として時間的な倒錯をきたし、往々にして、それが創作のうえにもあらわれてくるものである。作家はそこに驚きを感じ、数々の新しい発見をする。「言葉はひとりであふれてきて、興にのった作者を、幼時の楽園、全く地上的な楽園、影の部分に宿してはいるが、とにかく一つの楽園のかたへといざなっていた⁽¹¹⁾」。語るのは子供であり、書くのが大人である、とグリーンは言っている。

それはさておき、成人してからも幼稚な自然な形で愛情を求められる相手は、やはり母親だけであろう。中でも、父を失った一人息子の場合、その種の愛情が顕著に示され、しかも異性間の愛情がからんでくる。ポレルが処女作で表現した愛は、まさにその典型である。この小説における主人公たち（語り手の「私」とその母親）の愛情の絆は、いわゆるマザー・コンプレックスであり、二人は結局お互いの愛を反省しつつ、「私の生涯で一番偉大な恋人は、お前（あなた）だ」（*Le grand amour de ma vie, c'est toi.*）と言ひ合うのである。そういう〈熱愛〉が、息子の結婚生活をはばみ、母親がいかに努力して別居の孤独に堪えようとしても、最後には、恋愛から出発した息子夫婦の關係にひびきを入れてしまう。それはかりか、母親は次第に陰気な心情にとざされ、神経症となって自殺をはかり、しまいに精神病院へ入って廢人となり果てるのである。『私生児』に比べればはるかに常識的な世界に住む作中人物たちではあるが、作者のじつくりと腰をすえた執拗な筆で、延々六百ページにわたって掘り下げられた人間の深淵には、結局、何びとの心にも秘められた愛憎の姿、『息子と恋人』（D. H. Lawrence）などとも共通する世界が、あらためて発見されるのである。

「靴よ、お前に熱情というものを教えてあげよう」と、『地の糧』をもじって呼びかける少女にとっては、「それ（靴）だけが、（彼女の）夜ふかしと文学熱にふさわしい話相手だった」のであり、ボレルは「私にとっても、彼女（母）にとっても、すべてはその時（父の死期）に始まった」と言い、「すべての発端となったこの欠けたもの」を自己のうちに探りあてるのである。彼等には、その負（maque）から有（作品）を生み出すほかに生きる道がなく、創作という行為のみが、幼い頃、何かを求めた代償行為の、知的に高く昇華した別の代償行為となるのであろう。

ロバール・カンテール Robert Kanters は、近年とみに目立ってきた自伝や自伝的小説をとらえて、そもそも自分を語る作品というものに二つの傾向があることを指摘している。一つは、シーザー的表现、すなわち自分を解説し、自己の行為の方法や結果のみを三人称でも表わし得る程度に語る行き方。もう一つは、聖アウグスチヌスの表現、つまり自らを告白し、自己の成生過程にのみ密着しながら、自己自身を形成すると見なされる対象人物に語りかける方法である。現代的な傾向としては、作家以外にも外交官や政治家など行動人のものす記録的な自叙伝も多くなってきたが、内面生活の思索家と称すべきアウグスチヌス型の作風も次第に増してきていて、この批評家は書いている⁽¹²⁾。さらに彼は、昨今、告白体もの（*coffession*）が小説（*roman*）より実り多い文学的なジャンルとなりつつあるとまで言い、その例として J・グリーン⁽¹³⁾の近作『遠き大地』をはじめ、フランソワ・ヌリッスイエ『あるフランス物語』、ピエール・アンリ・シモン『私の信条』および F・モーリアック『新・内面の記録』⁽¹⁴⁾をあげて論述している。

ところで、現代のような複雑で急速な発展を示す社会にあって、人間個人は、それぞれの形で自己の自由・幸福・愛の欲求、一口に言って人間的な生活を絶えず圧迫され、おびやかされながら生きていかなければならない。現代人は、いわば社会的価値の混迷状態に陥って神経症的な不安を禁じ得ない。もしそういう人々が、文学に何ものかを求めるとするならば、告白的な作品の存在余地も十分にとめられると思う。同時代におなじ社会おなじ世界の空気を吸って苦闘しつつ生きる人々にとって、その時代の内的苦悩を語り、しかも自己の体験を特異例外的な記録にとどまらず、創作の域にまで昇華させた告白的な文学は、万人の心底にわだかまる希求を代弁し

てくれるであろう。ポーヴォールも言っているように、「孤独の底からわれわれに語りかけてくれる人は誰でも、われわれのことを語って⁽¹⁴⁾いく⁽¹⁴⁾」からなのだ。彼等は、いわゆるへお話⁽¹⁴⁾は持ちあわせていない、彼等「自身がお話なのだ」からである。そこで、この種の作品をカンテールの言うように一つの文学的ジャンルと考えるならば、グリーンこそは、すでに早くからその姿勢をはっきり示してきた中心的な作家であると言えよう。(もはや紙面の余裕は少ないが、ここでこの作家の最近作を交えて、いま少しく追考してみることにする。)

グリーンの近年新たに語る自己の真相は、母親(米南部出身者)の教育と早逝など、彼独自の境遇と、アメリカの新教を経たのちのカトリックの信仰などによって、異常な成長をとげたことであった。告白的自伝は、さきの二卷⁽¹⁵⁾につぐ三作目が公刊されたが、その詳しい人生体験の底には、一つの線がはっきり描かれている。それは、今度の『遠き大地』に至って一層うき彫りされた感のある「誘惑に対する絶え間ない争いの跡」*la trace d'une lutte [à peu près] incessante contre les tentations*』である。今回は、アメリカでの大留学期間中の生活について述べられているが、その中心的な問題は、学友との関係、しかも美男子に対して禁じ得ない愛情のテーマである。生徒ジュリヤンは、それを深く心中に秘め、宗教的な罪の意識に悩まされては聖書を開いて心をしずめながらも、純粋な愛、プラトニックな恋愛感情として肯定しようともしていた。

「自分の力ではどうにもならないのに、こういう自分であることが、果たして罪なのだろうか?」私の頭には、愛についてはっきりとした観念ができていた。一方では、かつてのリセの学友フレデリックと同様、マークに私を惹きつけている理想的な愛を想い、(中略)もう一方では、肉と密着している全く動物的な愛がある、と私は考えていた。⁽¹⁶⁾

ことにこのマークという青年に対する特異な「愛の秘密」(*le secret de l'amour*)、「官能的なものとは全く相容れない愛」(*un amour qui exclut toute idée sensuelle*)は、レオトーヤやボレルにとって、母親への愛が自然な恋情と感じられたように、神の摂理にもとるものとは断じきれない〈*sentiments d'adorations*〉だったのである。⁽¹⁷⁾(当時、ある学友からH・エリスの本を読まされ、男女の性行爲にひどく嫌悪を感じて、自分にその性向がないことをむしろ喜んだということもあった。)フロイトは同性愛者を分けて、一方は倒錯

を当然と認め、正常者と同じ権利があると思う者。これに反して、自己の倒錯に反抗し、病的な強迫と感ずる者があると考えた。グリーンは、同性愛という言葉を決して口にはしないが、前者であり得るはずはなく、作品でその苦衷をしばしば洩らしている。

「相手が両手を使って、肌にくっついたシャツをはぎとると、汗に光るその上半身がむきだしになった。本能的にジョゼフは目をそむけた。」⁽¹⁸⁾

グリーンの小説から引いた一節(格闘の場面)だが、こういう要素は、かなり以前から極めてひそかな調子で暗示的に創作の上にあられていたのである。それは、作者として自己を語る前ぶれであったのだが、終に「自分の真実」を直接に語りたという衝動を抑えきれなくなったようだ。三つの連作で、彼は文字通りの告白文学を世に問い始めたわけである。グリーンは、決してルデュックのような悲遇の人ではない。両親の点でも、ボレルやレオトーより恵まれた人である。それにもかかわらず、すでにほかで詳述したとおり、彼も結局はいわゆる常態的な人間として成長することができず、一つの大きな偏向を性愛の点で身にうけなければならなかった。⁽¹⁹⁾愛情の偏差というものは、どういう条件で、いかなる原因によって蒙らなければならぬものか、われわれが人間の問題として考えるべき重要な事柄の一つではないだろうか。文学作品をこういう角度から見るのは、余りに文学的享受とは遠いことかも知れないが、「女たちを愛せたら、どんなに人生のすべてが、もっと気楽だったことだろう！」という偽らぬ詠歎をきくにつけ、少なくともこの種の告白文学には許されるべきことと信じるものである。

グリーンは、大学時代にアメリカの叔母から言われた言葉として、「私たちの心のうちには、何か決して変らないものがある。それは、**私**と言っている人間で、その人に神様がひそかに語りかけ給うのだ」と書きとめている。けだしわれわれはグリーンとともに、この「決して変らぬ何ものか」(quelque chose qui ne change jamais)を探っていききたいものである。彼の文学のなかに、そしてわれわれ自身のなかに……

(一九六六年八月)

注1 《Ah! la vie à l'envers. D'habitude, c'est par sa mère que l'on commence, seins charmants, dont on ne peut pas se passer. Puis l'on grandit, on devient un homme, et d'autres amours nous font un peu négliger le premier.》(Paul Léautaud : *Le Petit Ami*, Mercure

de France, 1956, p. 171)

- 2 《Mon cas n'est pas unique.》(Violette Leduc : *La Bâtarde*, Gallimard, 1964, p. 19)
なぞ この女流作家の経歴は古く、処女作《*L'Asphirie*》(盛島)以来、すでに数巻を重ね、ボーヴォワールはじめカミユ、サルトルなど一部の人々からは高く評価されてきた。幼時からの体験をもとに、同性あるいは男色家(モーリス・サックス)との異常な恋愛が大胆に記されている。
- 3 《Il montre avec une exceptionnelle clarté qu'une vie, c'est la reprise d'un desin par une liberté.》(*La Bâtarde*, p. 8)
- 4 《Je n'ai pas connu mon père. J'avais quatre mois quand il mourut, et il était entré à l'hôpital dans la semaine, ou quinze jours peut-être, qui suivirent ma naissance.》(Jacques Borel : *L'Adoration*, Gallimard, 1965, p. 7)
- 5 《*Les carnets du temps qui passe*.》(Le Figaro Littéraire, No. 1023—jeudi 25 novembre 1965)
わた、キレルは受賞後『*書斎*』(La Bibliothèque)の題「N. R. F.」(一九六六・一)誌上で、読書好きな幼時の回想を綴っている。
- 6 《Ce petit garçon de chair et d'os que j'étais et qui souffrait obscurément d'il ne savait quel manque.》(*L'Adoration*, p. 71)
- 7 《Elle eut une enfance solitaire. Toute marque de tendresse lui étant refusée, elle devint silencieuse et renfermée en elle-même. Souvent elle s'accroupissait dans le coin d'une chambre et s'amusait sans rien dire de tous les objets qu'elle trouvait à portée de sa main, les pieds des meubles, la frange d'un rideau : (.....)》(Julien Green : *Mont-Cinère*, Plon, 1926, p. 31)
- 8 《Comment eussé-je ressenti la mort de mon père comme un manque, comme un abandon ? Son absence, en somme, à peine la remarquais-je.》(*L'Adoration*, p. 10) 《Je dis que mon père était, comme lui, capitaine de frégate ; qu'il commandait un torpilleur lancé récemment : le *Terrible*.》(Id., p. 11)
- 9 《Où est ta mère ? — Elle travaille à Paris. Elle m'écrira. — Où est ton père ? — Je te dis que ma mère travaille à Paris. (.....)》
- 10 — Parce que tu ne m'écoutes pas. Ma mère, c'est mon père.》(*La Bâtarde*, p. 50)
ハーニョ・トロフ『*霧の国*』藤田克昭訳(紀伊國屋書店)
- 11 《Les mots venaient deux-mêmes, conduisant l'auteur réjoui vers le paradis de l'enfance, un paradis tout à fait terrestre, non dépourvu de coins d'ombre, mais un paradis malgré tout.》(J. Green : *Qui je suis*, Le Figaro Littéraire, No. 1035—jeudi 17 février 1966)
- 12 R. Kanters : *Du côté de Montaigne et du côté d'Augustin* (La Revue de Paris, mars 1966)
- 13 J. Green : *Terre lointaine* (Grasset, 1966) ; François Nourissier : *Une histoire française* (Grasset, 1965) ; Pierre-Henri Simon : *Ce que je crois* (Grasset, 1966) ; François Mauriac : *Nourtureux Mémoires intérieures* (Flammarion, 1965)

14 ≪Et quiconque nous parle du fond de sa solitude nous parle de nous.≫ (La Barade, p. 7)

15 『夜明け前の出発』 *Partir avant le jour* (Grasset 1963) と 『道は数限りなく』 *Mille Chemins ouverts* (Grasset 1964)

16 ≪Eatrice donc un péché d'être comme j'étais, alors que je n'y pouvais rien ?≫ (J. Green : *Terre lointaine*, p. 232)

17 ≪Il se format dans mon esprit une conception précise de l'amour. D'une part, je voyais l'amour idéal qui m'attachait à Mark comme jadis à Frédéric, mon camarade de lycée, (.....) De l'autre, il y avait, pensais-je, l'amour tout animal qui se rivait à la chair.≫ (Id., p. 160)

18 なおマークという人物は、グリーンが帰仏して以来、第二次大戦当初の渡米までに三度会い、すでに家庭があり、現在なお在世のよしである。両者の交情をたどってみると、男女のプラトニックな恋愛・別離・再会と全く等しい。この作品を通読すると、同性愛は当人にとって正常なものだ(フロイト)とか、異常人は単に乱れた形で正常人の、ある相を表示しているにすぎない(H・エリス)などという説に改めて思い当たるのである。

19 ≪Par un geste des deux mains, il arracha sa chemise qui lui collait à la peau et son torse apparut, tout luisant de sueur. Instinctivement, Joseph se détourna les yeux.≫ (J. Green : *Mohra*, Plon, 1950, p. 30)

20 二・三の専門書によって、同性愛の起因の顕著な点をひろってみると——一般に男性の場合は後天的なもので、母親が年配者、本人が末子という関係。同時に母親が強い性格で一家の中心となり、夫の力が弱いか、または家庭や子供に無関心となったり嫌ったりする場合。従って母親が子供と極度に親密で愛情過多に陥り、子供も母を一家のボスの存在と仰いで、その偏愛の対象 (*favourite*) となることが多い。もちろん各々のケースは違った特徴・症状を示し、人間の先天性も無視できない要素であって、到底われわれ門外漢の関与し得ることではない。ただ、ジッドやグリーンなどの場合を見ても、専門家の挙げている例と酷似した条件がみとめられ、いわゆる母拘束が、広く神経症の原因ともなる重要なキーポイントになっているようである。(一方、社会通念も間接的な影響となるが、ことに英米のピュリタニズムをはじめ、欧米キリスト教の偏見による性罪悪感が、別の大きな要因である。)

『きりがない説明を要求するこの世まよひこと(精神分析学)を私は信用しない』とグリーンは言っているが、それでも、若い頃に一時フロイト、ユング、エリス、シュテークルなどにかなり傾倒した以上、精神分析や性科学の影響は、彼の自己探求と作品のうえに反映してはいないとはいえない。これらの問題についてもほかでふれたことはあるが、さらに補足する意味でここに付記した次第である。(ジークムント・フロイト 『精神分析入門』 『性や愛情の心理』 メダルト・ボス 『性的倒錯』 Anthony Storr : *Sexual Deviation*; Donald West : *Homosexuality*; Dr Hans Giese : *L'Homosexualité de l'homme* などを参照)